
ハイスクール・ストーリーズ 僕が出会った不思議な少女

西野了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクール・ストーリーズ 僕が出会った不思議な少女

【Nコード】

N1703Z

【作者名】

西野了

【あらすじ】

中学のころ不登校だった僕は、通信制高校に通い始める。その高校の入学式で僕は不思議な少女に出会った

幼馴染は優等生（前書き）

「受験生だけと恋をした」のスピノフです。でも本当は「受験生」の方が、この作品のスピノフなんだけどね。

幼馴染は優等生

今日は中学校の卒業式が行われた日だった。

僕は自分の部屋でぼんやりとパソコンのモニターを眺めていた。南向きの部屋はいつの間にか薄暗くなっていた。

時はいつも平板でのっぺりとしている。気がつけば夕方だったり、夜だったり、真夜中だったりする。僕はいつも曖昧な薄闇の中にいた。

宮田が卒業証書を届けに来たのは、窓から差し込む光が茜色から藍色に変わる頃だった。玄関先で母が彼女にお礼を言っている。

「遙ちゃん、悪いけどその卒業証書、遙ちゃんから達也に渡してくれない？ あの子もきつとその方が喜ぶから」

母の声はった、また哀願するような響きがあった。

（余計なことを・・・）僕の胸の中から苦々しく惨めな想いが湧き出てきた。

軽くドアをノックする音が聞こえる。

「達也、入っていい？」低くも高くもない遙の声だ。

「ああ・・・」僕の声はくぐもっているように聞こえる。

「ガチャ」とドアが開く音とともに、制服姿の遙が入ってきた。

僕は遙と会うといつも感じるのだが、彼女の制服姿には違和感がある。それは成熟した女性に無理やり中学生の制服を着せているような不自然さだ。もちろん遙は十五歳でれっきとした中学生だが、その身体から出る雰囲気や言動、そして容姿はいずれも成人のものだった。

「はい、これ。達也もこれで少しは解放されたでしょ？」

遙は卒業証書の入った黒い筒を僕にリレーのバトンパスのように渡した。僕はその筒を受け取ったが、中身も確かめず机の上に置いた。

彼女は僕のその行為を見て、クスツと笑った。それからベッドに

ゆっくり腰を下ろし、眼鏡をはずしハンカチでレンズを磨きながら、訊いてきた。

「四月からどうするの？」

母はお喋りだが肝心なことは伝えない。

「通信制の高校に行く」

「ふーん、そつかあー」遥は僕の答えを最初から知っていたような、そんな答え方だった。

「達也にとっては、その方がいいのかもしれないね」

眼鏡をかけなおした彼女の瞳は少し淋しそうな色が浮かんでいた。そして僕は、遥が通信制の高校それもサポート校の情報をたくさん集めたのだろうと推測した。だけど彼女は僕に対して、そんなことは一言も言わなかった。

昔から遥はそんな奴だった。素晴らしく速く回転する頭脳は柔軟な思考回路をもっていた。そして彼女は整い過ぎた顔立ちから冷たい印象を周囲に与えていたが、本人はそれを取り繕うことはしなかった。もっとも大抵の人間は彼女と二言三言言葉を交わすと、その第一印象が誤りだと気づくのだが。

僕が一年半前から学校に行かなくなっても、遥は以前と変わらぬ様子で僕と接してくれた。僕が不登校になって最初のころは、さすがに遥も少し戸惑ったようだった。だから彼女が僕の部屋にやってきても落ち着かなかった。だが僕の不登校が一週間を過ぎると、慣れてきたのか、それまでのぎくしゃくした雰囲気が消え、いつもの彼女に戻っていた。

僕たちは幼い頃から、いろいろなことを語り合ってきた。

僕は男の友だちといるときよりも、遥といるときのほうがリラックスできた。（遥もおそらくそうだと思う）けれども僕は彼女に対して、恋愛感情を抱いたことは一度もなかった。（彼女もそうだと思う）つまり遥は、親よりも誰よりも僕のことを理解してくれている人間で、もっとも大切な友だちだということだ。

不登校の間、僕は部屋にこもって本を読んだり、ネットサーフィ

ンをしたりして時間をつぶしていた。そして遙がときどきやってきて、彼女と話をすれば僕はそれで結構満足できた。他の人間と話さなくても、そんなに淋しくもなく孤立感を感じるわけでもなかった。だが、そろそろ自分をリセットする時期だった。遙もそれを望んでいるし、僕ももうあのくだらない中学校のシステムに縛られることはないのだから。

入学式で眠る少女

高校校の入学式の日、いきなり僕は不思議な女の子と出会うこととなる。

その女の子は僕の隣の席に座っていたのだ。なんと彼女は入学式の途中からすうすうと気持ちのよさそうな寝息を立てて眠ってしまった。そしてあるうことか、僕の右肩に形のよい頭を乗せてしまっている。列車の座席で恋人同士が嬉しそうにお互いの頭をくっつけて寝入っている様子を見ることがあるけど、僕自身がそのような状況に追い込まれるとは思ってもみなかった。ましてや今は入学式なのだ。

ところが学校の先生たちは困惑の表情を浮かべるわけでもなく落ち着いている。なかにはクスクス笑って興味深そうな顔をしている先生もいる。(なんて奴だ!)他の新入生も気づいたようで、面白そうにこちらをちらちら見ている。

しかし周りのざわついた雰囲気の中でも彼女はまったく起きる気配はない。さすがに僕もこのまま彼女に肩を預けているわけにもいかず、どうしたものかと焦ってきた。

僕は彼女の頭が乗つてある右肩を数回揺らした。そして制服の左胸の名札を見た。加納ミドリと書いてある。

「加納さん、加納さん」

彼女の耳元で小さく呟くと、大きな黒い瞳がトロンと開いた。それから僕をぼーっと見た。彼女はまた夢の中にいるようだった。僕は再び囁いた。

「加納さん、入学式、今」

彼女はその言葉を聞いて、はっとした表情を浮かべ、そしていきなり立ち上がった。

「ハイ!」

なにを勘違いしたのか、直立不動の姿勢で大きな返事をした。――

瞬の静寂の後、ドオーという笑い声が会場を満たした。彼女は数秒間呆然と突っ立ったままだったが、ようやく事態を呑み込めたようで、「ありゃ」と言いながら腰をおろした。そして「えへへへっ」と笑いながら僕を見た。その悪びれることもない無邪気な笑顔を見て、突然僕の心臓の鼓動は僕の意思に反して大きな音を立てた。

僕はこうしてミドリと出会ったのだ。

僕が毎日、高校に通う理由

ミドリはいつもラフなファッションをしていた。いや正確にはいい加減でだらしない格好だった。

学校に来るときは、だいたい薄汚れたジーパンに無地のTシャツ、その上にだぶついてくすんだ緑色のジャンパージャケットを着ていた。そしていつも大きな厚手の布袋を抱えていた。

彼女は意外にも授業にはちゃんと出席していた。そして授業態度も真面目だった。しかし授業が始まって二、三十分経過すると、俯いて頭を抱え「うーっ、センセちよっと休憩していいですかあ？

脳がパンクですう」とリタイアする。そんなとき彼女は休憩室の椅子にぐたあーといった雰囲気で、座っているような寝ているような微妙な姿勢で休んでいた。そんな格好で五分から十分休憩すると、健気にもまた授業に戻っていくのだ。

一方僕のほうは、久しぶりの学校生活だったが、何とか頑張って毎日登校していた。

この学校は自分のペースで授業を選べるので、その点では気が楽だった。僕は集団で一斉授業を受けるより、マイペースでこつこつ勉強するナイーブなタイプの人間である。

それから中学校のぎすぎすした、非同調分子を排除するような空気も今のところ感じなかった。もっともまだ一年が始まったばかりなので、生徒一人ひとりが他者を警戒していたのかもしれない。ここは僕みたいな不登校の生徒や高校を中退して再度入学したきた奴とか、そんなややこしい人間ばかりだ。

学習面からいえば実は僕はそれほど遅れていない。読書は大好きだし、教科書を読んで問題集も取り組んでいた。わからないところがあれば、遙に質問すればよかった。彼女は学校の教師よりも的確に教えてくれた。(そういう意味でも、遙はとても貴重な幼馴染だ) 陰険な眼差しで嫌味しか言わない教師なんて、ホント無用の長物だ！

入学当初は、新しい環境に適應できるか、ものすごく不安だったが、時が経つにつれなんとかやっていけるのではないかと少しだけ思えるようになった。

もっとも入学以前からインターネットでこの学校の情報はかなり収集していたので、ある程度の見通しはもっていた。またこの高校はこまめにホームページを更新していて、それも丁寧なもので好感が持てた。学校説明会にも恐る恐る参加したが、その第一印象は（ああ、ここならなんとか通うことができるんじゃないか？）というものだった。僕の身体全体がOKを出していたのだ。もちろん当初は高校から帰れば疲れがドーッと出て、そのままボタンキョート眠ってしまうことも度々だった。しかし徐々に高校の雰囲気慣れ、あまり緊張しないで話すことができる友達もできたことで、僕の抱えている疲労感は少しずつ減っていった。そして僕が毎日高校に通うことができる一番の理由は、気になる女の子、加納ミドリがそこにいることだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1703z/>

ハイスクール・ストーリーズ 僕が出会った不思議な少女

2011年12月6日23時47分発行